

退職に寄せて

「にいしゃんなーるちゅ」—教育研究の軌跡

山田 眞一

富山大学 学術研究部 芸術文化学系 教授

芸術文化学部の前身である、国立高岡短期大学に私が赴任したのは1988年4月のことであった。爾来、33年間にわたる教員生活を大過なく送ることができたのも、多くの人の支えがあったからである。私を学究の道に導いてくださった恩師、対話を通じて知的刺激を与えてくれた学生や同僚、日々の教育研究を支援してくださった職員の方々、そして、苦楽を共にし心のよりどころとなってくれた家族に心から感謝したい。

きっかけ

私が初めて耳にした中国語は、母の口から発せられる「にいしゃんなーるちゅ」（どこへ行くのですか）という、高低昇降のアクセントを伴った歌うように流れる音の連続であった。若い頃中国の東北地方で数年暮らしたことのある母は、ごくまれに中国語を口にすることがあった。時をたぐるように思い出を語るまなざしの向こうには、いったいどんな世界が広がっているのだろう、母が褒めそやす大地に沈む大きな夕陽をいつかこの目で見てみたい、そう思ったことが中国語を学ぶきっかけとなった。大学で中国語を専攻し20代半で北京に留学した時それは現実のものとなった。文革が終息し、改革開放へと中国が大きく舵を切り始めた1979年9月、北京空港に降り立った。首都の玄関口に似つかわしくない、古い駅舎にある改札口のような木製の入国ゲートを出た時に辺りに漂っていた鼻をつく刺激臭と、ぼつぼつと街灯のともる夜道をカタカタと駆ける、留学先の大学が用意したマイクロバスの中で感じた期待と不安の入り交じった奇妙な高揚感は、まるで昨日の出来事のように今でもはっきりと覚えている。2年間の留学生活での体験、彼の地で出会った人々との交流を通じ五感で体得したこと、これが今の私の原点になっている。

教育研究

教育と研究はしばしば区別して語られることがあるが、私にとっては表裏一体、不可分のものである。これは高岡短大に赴任する前の数年間、中国語辞典の編纂業

務に携わっていたことが影響しているかもしれない。辞書の中に閉じ込められたことばたちは、辞書から飛び出し、言語活動の場で使われることで初めて息をし始める。ある単語に語積をつけるときには、そのことばが使われる場面や状況を考える限り簡潔に記述する。ことばをことばで説明する限界と向き合いながら辞典の編纂作業をしていると、ことばとことばがせめぎ合って新しい命を生み出す、そんな風を感じることもある。研究と教育の関係もそれに似ていて、研究は教育（あるいは社会）に活かされてはじめて価値あるものとなるという考えが私の中にあり、それは終始変わることはなかった。

短大時代

高岡短大時代は「産業情報学科」に所属し「ビジネス外語専攻中国コース」の教育を担当した。地元の強い要望により開設された高等教育機関に、中国語を専攻するコースが設けられたのは、高岡からほど近い福光が松村謙三氏の故郷であることと関係があるように思う。松村氏は日中間に国交がない時代に中国との関係改善に尽力したことで知られる政治家である。「井戸を掘った人を忘れない」ということば通り、李鵬氏（当時の肩書きは全国政治協商会議常務委員会委員長）は来日した際、福光にある松村記念館を訪れ献花している。院生時代2年間、中国語音韻論の講義をしてくださった平山久雄先生は松村氏のご子息のお一人であり、私にとって高岡を身近に感じる一因となっている。

短大時代の教育は短期「全集中」型で、語学教育に関しては内容的には四年制大学の外国語学部と比べてもそれほど遜色のないカリキュラムであった。ゼミ生数名とともに取り組んだ教育成果である『中国北方諸方言語彙集（初編）』（図1）は、当時の宮本匡章学長にお願いして大学の刊行物として公刊し関係機関に寄贈した。『語彙集』の存在を知ったドイツ国立情報処理研究所（GMD）からは、「初編」および「二編」以降の寄贈を依頼する旨のFAX（図2）が届いた。しかし、大学の再編統合により高岡キャンパスから中国語を専攻する学生はいなく



図1. 中国北方諸方言語彙集 (初編)



図2. ドイツ国立情報処理研究所 (GMD) からの FAX

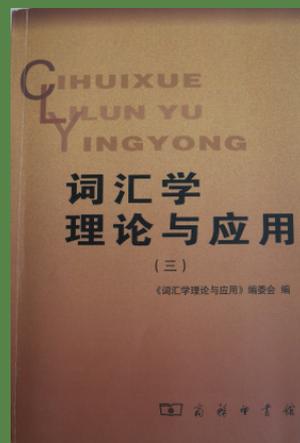


図3. 词汇学理论与应用 (三)

なり、続編が出ることはなかった。

短大時代の仕事で印象深いのは、中国の小学生の作文語彙に関する論文『小学作文詞彙使用情况』（『小学生作文語彙の使用状況について』）である。これは中国語母語話者が言語形成期にどのように語彙を習得していくかという問題の一端を解明することを目的に、中国社会科学院言語研究所での在外研究中（1999年）に収集した北京の小学生の作文資料をもとに分析・考察したものである。分析結果から得られた知見と同じくらい興味深かったのは、第一次資料となる手書きの作文を手に入れるプロセスで経験したことである。言語研究所に書いてもらった紹介状を手にて北京市内の小学校を訪ね、校長や教務主任に研究目的を説明し、小学1年生から6年生までの作文原稿を収集した。学校側の対応はさまざま、研究テーマに興味を示し、研究成果をフィードバックすることを条件に快く資料を提供してくれる学校もあれば、作文1編につきいくらか対価を要求されることもあった。この論文は、2004年4月に武漢大学で開催された「中国語語彙学第1回国際シンポジウム」において口頭発表した内容に加筆したもので、シンポジウム終了後125編の発表から選ばれた24編のうちの1編に加えられ、『词汇学理论与应用 (三)』（『語彙学理论与应用 (三)』（商务印书馆、2006年）（図3）として出版された。余談だが、中国では規模の大きな学会会議は四つ星クラス以上のホテルあるいは大学構内にある同程度の設備を有するゲストハウスを使って行われ、開催期間中は参加者全員が寝食を共にするのが通例である。食事のたびに食卓を囲む顔ぶれは入れ替わり、共によく食べ、よく飲み、よく話すことで研究者間の交流が密度を伴って広がっていく。

芸文時代

高岡キャンパスには専門分野の異なる同僚が身近にいて、自分から一歩踏み出せば他分野の専門家の知見や経験に容易に触れることができる。これは自分の専門領域を俯瞰的に内省し、専門性に対する認識をより深める上

で、またとない絶好の環境である。芸術系学部に所属する中国語担当教員としての仕事の方向性を定めるべく、芸術教育の基礎のひとつであるデッサンの授業を受けようと思い立ち、担当の安達博文先生に相談したところ、モデルになることを条件に受講を許可された。クロッキー、自画像、静物、人体、石膏デッサンと難度は徐々に上がっていき、2コマ連続の授業はあっという間に過ぎてしまった。デッサンの授業を通して気づいたことは、自分がいかにモノを観ようとしていないか、ということであった。自画像にいたっては「目」以外には手を入れることがほとんどできなかった。テクニック以前に、対象を描けないのは「見ている」だけで「観えていない」からだ、ということを知ることになった。背景を含めた対象の本質を捉える、しなやかで確かなまなざしをもつことの大切さと難しさを知り、かたちを写しとるのに頭と手を連動させることができないもどかしさを実感した授業であった。学ぶ側の視点から同僚の授業を受けたことは、自身の教室活動を振り返る上でも得る所が多かった。

4年前から大学院の授業で林曉先生が主担当の「工芸技術特論」の一部を分担しているが、このきっかけは短大時代にさかのぼる。当時、産業造形学科漆工芸専攻の教授でいらした横山幸文先生から、学生に読んでやってほしいと一冊の本を手渡された。それは『漆藝鑑賞』（索予明著、行政院文化建設委員会）という、中国の各時代の代表的な漆器について、カラー写真とともに簡潔で格調ある中国語で解説された60頁ほどの冊子であった。その最後のページに『髹飾録』の序の一部と短い解説があり、『髹飾録』は「乾集」「坤集」の二巻からなる明代に書かれた漆工技術書で、原本は中国では散逸し写本が東京国立博物館に所蔵されていると記されていた。当時は「数奇な運命をたどった書籍」というぐらいの感想しか持たなかったが、その「序」を一読しただけでも、技術の背景にある中国思想と結びついた一筋縄ではいかない書物だということは見て取れた。横山先生から出された宿題がいつまでも提出できないことに忸怩たる思いを

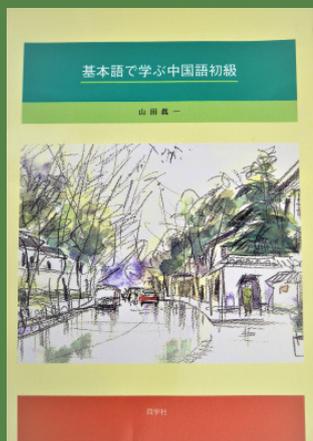


図4. 基本語で学ぶ中国語初級



図5. 500語マスター
基本中国語



図6. ポケットプログレッシブ
中日・日中辞典



図7. 中国語一年目の教科書
ユニバーサルユース

抱えたまま時が流れた。退職を5年後に控えたある日、思い切って林先生に『髹飾録』の話を持ち出したところ、「おもしろそうだからやってみましょう」と賛同を得て先生の助けをお借りしながら『髹飾録』を読むことになった。写本の一字一句をさまざまな角度から読み解いていくので、4年かけてようやく「乾集」を読み終えたばかりで、宿題はまだ半分しか提出できていない。ところが思いがけないことに、清華大学芸術学部の周剣石教授を団長とする一行が芸文を訪れた際に、授業で『髹飾録』を読んでいることを紹介したところ、周教授から2019年10月に湖北省荆州市で開催する国際漆芸シンポジウムで発表するようにとのお誘いがあった。漆芸についてまったくの門外漢である者が、漢代の漆器が多数出土する楚の国都があった場所で、専門家を前に中国で散逸した漆工技術書について話すことになるとは、高岡に赴任した33年前には思いもよらぬことであった。こうしたことが実現したのも、他者に対するリスペクト、すなわち行為としての教養の気風に満ちたこのキャンパスで仕事をしているからこそ可能になったのだと思う。

初級中国語を学修した学部3年生を対象とした授業では、学生の興味に合わせて教材を選ぶことを心がけた。たとえば、昆虫の形態に関心がある学生には、ムカデやサソリやカエルやカマキリが悪役で登場する、中国の民話をベースにした子ども向けのアニメーションを取り上げ、動物の持つ記号的意味について討論した。中国の民謡を知りたいという学生には、中国の無形文化財に指定されている客家山歌を題材にし、情愛の気持ちを歌に託す伝統的な手法が満載された、土の匂いのする詩を、どこか懐かしさを感じさせる伸びやかな韻律とともに味わった。芸文生への中国語教育を通して教えられたことは、ことばの教育において大切なことは、発音、語彙、文法といったことばの外側ではなく、「おもしろい」と思うこと、「知りたいこと」「伝えたいこと」があるという、考えてみればごく当たり前のことである。もちろんその言語の母語話者が理解できるような言語形式で伝えることは必要だが、「なに」を、「どのように」の前に、「な

ぜ」ということの方がことばの教育においてはより本質的である。この事に気づかせてくれたのは、授業中に見せる学生たちの好奇心に満ちた眼の輝きであった。

私が退職することで高岡キャンパスから中国語の授業はなくなる。一抹の寂しさはあるが、グローバル化の様相が変わりつつある昨今の情勢を考えると、何年後には、高岡キャンパスは時代のずっと先を走っていた（あるいは走ろうとしていた）、ということになるかもしれない。自由でのびのびとしたキャンパスで教員生活を全うできた喜びをかみしめながら、もう立ち入ることのない研究室の扉を閉じよう。

研究室のあるC棟4階から山際に沈む夕陽を眺めていると、空の色が黄金色からあかね色、やがて淡い紫から濃い紫へとコマ送りをするようにゆっくりと変化していくのが見える。日ごと季節ごとに見せるその表情に同じものはなくいつまでも見飽きることがない。夕闇が迫るこの一刻に身をゆだねるとき、かつて大陸で見た、地平線まで続くコーリャン畑の果てに沈んでいく大きな夕陽が、天空を勢いよく朱色に染めていく迫りに圧倒されたときの光景と感動が呼び起こされる。コーリャン畑は今や高層建築群に姿を変え、夕日は煙霧に覆われ、いつまでもぼんやりとしたままである。「にいしゃんなーちゅ」、このキャンパスで過ごした日々の思いを糧に、旅はまだ続く。

(令和3年1月27日記)

略歴

1955年 兵庫県西宮市に生まれる／富山県高岡市在住
1984年 東京外国語大学大学院修了

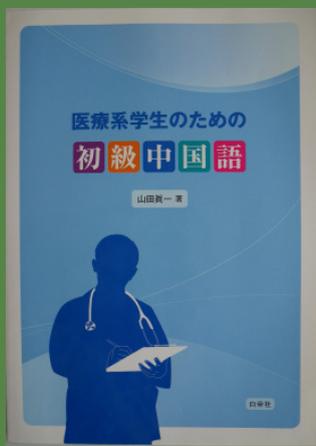


図8. 医療系学生のための初級中国語

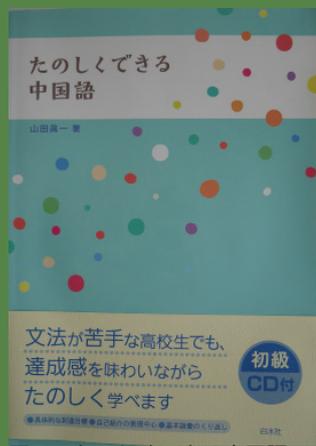


図9. たのしくできる中国語

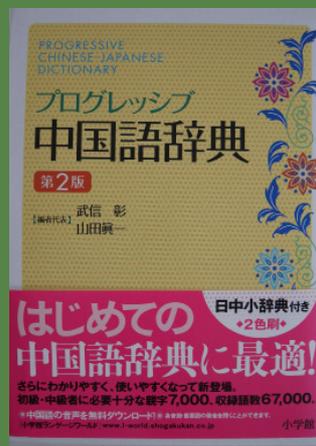


図10. プログレッシブ中国辞典 第2版



図11. 500語マスター やさしい中国語

表1. 主要な業績

著書、学術論文の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称
(著書)			
1. 中原官話課本	共著	昭和62年7月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
2. 中国省別ガイド③遼寧省	共著	平成4年9月	弘文堂
3. 中国省別ガイド⑤北京市	共著	平成4年12月	弘文堂
4. 中国省別ガイド⑥福建省	共著	平成5年3月	弘文堂
5. 中国語大辞典	共著	平成6年3月	角川書店
6. 中国北方諸方言語彙集(初編) 図1	共著	平成6年3月	高岡短期大学
7. 中国語 問題と解答 中文和訳、和文中訳編	共著	平成6年12月	内山書店
8. ビジネス中国語 I	単著	平成10年3月	高岡短期大学
9. 基本語で学ぶ中国語初級 図4	単著	平成11年2月	同学社
10. 500語マスター基本 中国語 図5	単著	平成13年2月	同学社
11. 中日辞典第2版	共著 (編集委員)	平成15年1月	小学館
12. ポケットプログレッシブ 中日・日中辞典 図6	共著 (編集委員)	平成18年3月	小学館
13. 中国語一年目の教科書 ユニバーサルコース 図7	共著	平成18年12月	好文出版
14. 医療系学生のための初級中国語 図8	単著	平成21年11月	白帝社
15. たのしくできる中国語 図9	単著	平成25年3月	白水社
16. プログレッシブ中国辞典第2版 図10	共著 (編集代表)	平成25年3月	小学館
17. 500語マスターやさしい中国語 図11	単著	平成27年4月	同学社
(学術論文)			
18. 元雑劇《殺狗勸夫》注釈(一)～(四)	共著	昭和62年4月 昭和62年10月 昭和63年4月 昭和63年10月	『中国語研究』第25号、第26号、第27号、第28号、白帝社
19. 複雑な“変韻”を持つ獲嘉方言	単著	平成2年11月	『東方』116号、東方書店
20. 中日辞典にみられる日 中対照言語学上の問題	単著	平成4年10月	日本文学研究2(北京日本学研究中心紀要、中国科学技術出版社)
21. 中国語と日本語の人称代名詞の使用状況—「茶館」を中心に—	単著	平成5年3月	高岡短期大学紀要 第4巻
22. シンガポールの初等教育における華語教育—南華小学校の場合	単著	平成7年3月	高岡短期大学紀要 第6巻
23. 初級中国語習得のコツ—基本語彙習得のコツ	単著	平成8年3月	『中国語』第435号、内山書店
24. 中国語実践学習法—作文	単著	平成9年3月～ 平成10年1月	『中国語』第447号、448号、449号、450号、451号、452号、453号、454号、455号、456号、457号、458号、内山書店
25. 中国語を母国語とする日本語学習者の言語習得過程における若干の問題: 「生活言語」と「学習言語」をめぐって	単著	平成8年2月	高岡短期大学紀要 第8巻
26. 『新華字典』九八年修訂版—一修訂のポイントとその意義	単著	平成10年12月	『中国図書』、第10巻・第12号、内山書店
27. 学内LANを利用した中国語言語行動学習支援システムについて	共著	平成12年2月	高岡短期大学紀要 第15巻
28. 中国語入門講座	単著	平成13年3月～ 平成14年1月	『中国語』第495号、496号、497号、498号、499号、500号、501号、502号、503号、504号、505号、506号、内山書店
29. 台湾における漆工芸に関する調査報告	共著	平成16年3月	高岡短期大学紀要 第19巻
30. 小学作文词汇使用情况	単著	平成18年3月	商务印书馆出版社 商务印书馆出版社 『词汇学理论与应用(三)』、pp. 347～357
31. 中国語による教室談話における「つなぎことば」の機能	単著	平成24年2月	富山大学芸術文化学部紀要 第6巻
32. 中国語の芸術系科目における教室談話についての一考察—語彙を中心に—	単著	平成30年2月	富山大学芸術文化学部紀要 第12号
33. 『探録録』校勘記—本文の用字・用語を中心に—	単著	令和2年2月	富山大学芸術文化学部紀要 第14巻